

1905年の日露戦争後、大連と旅順を含める遼東半島南端は「関東州」と呼ばれ、日本の統治を受け始まった。日本の統治20年後、大連勸業博覧会は、1925年8月10日から9月18日に日本の最初の植民地博覧会として開催された。博覧会にて「美術館」という美術展示部門も設置され、文化発展の一面を示したということである。また、興味深いことに、「日華共存共栄論」の具体化を実現するために、この博覧会は日本人だけでなく、中国人にも参加を募った。本発表では大連勸業博覧会の中国美術展示のみの検討を通して、1920年代に盛んに発展する日中美術交流における本博覧会の意義を示したい。

「美術館」に出品された作品は、東洋画と西洋画、彫刻、工芸美術、芸術写真、中華現代画家作、古代美術など7部門に分類された。そのうち、中国人画家の出品は「中華現代画家の部」を形成する。しかし、日本人画家である渡辺晨畝（1867-1938）の名前は「中華現代画家の部」に示された。なぜ日本人である渡辺は「中華現代画家の部」に属するのか。また、それらはどのような作品なのか、20世紀初期の中国美術を代表できるのかという問題はまだ明らかにされてこなかった。さらに、現代の美術以外に、「美術館」にも「古代美術の部」を設置し、中国と日本の古代美術を展示した。主催者である大連市にとって、両国の古代美術を同時に展示することはどのような意味があるのかという問題を解明していきたい。

1924年の大連市政議会は改選された後、大連経済の振興を図るために、勸業博覧会の開催を企図した。主催者は日中両国民が経済的にも実業的にもお互いの関係を深めたいという狙いから、中国の商工業も勧誘した。美術出品の部分には、「北京金紹城氏」のみに依頼し、中国側の代表とした。この事実の背景は、金紹城が1920年代に行われた「日華連合絵画展覧会」の中心的存在であるということだと発表者は考える。金紹城と彼が主導した画会—中国画学研究会は「日華連合絵画展覧会」の中国側の代表であり、渡辺晨畝は日本側の代表の一人である。文献と作品の考察を通して、金紹城と渡辺が日中連合絵画展覧会を切望したのは、実は古名画と古美術のなかに、東洋美術の伝統を提唱したかったためと指摘する。こうした主張は両方の作品で示された。一方、勸業博覧会の東洋画部に出品された画家の多くは「新派」に属するので、渡辺晨畝の作品の画風及び、中国画学研究会の関係から考えれば、渡辺の出品は金城に勧誘されたことによる可能性が高いので、「中華現代画家作の部」に分類されたと推察する。

一方、彼らが主催した「日華連合絵画展覧会」の第4回より、古美術は現代美術と並んで展示された。しかし、大連勸業博覧会の「古代美術の部」は、日華絵画連合展覧会に先駆けて開催され、日中の古美術と現代美術を共同展示した最初の試みであろう。本発表は、20年代における日本側が中国美術に対する政策と活動を、大連市の経済発展の視点から分析し、大連勸業博覧会が「古代美術の部」を設置する動機を明らかにし、1920年代末の大連が日本側にとって対中文化事業に関する大切な拠点になっていたことを指摘する。